ISSN 2187-8358

Tamagawa Art Gallery Projects
2014—2015

Tamagawa Art Gallery Projects 2014—2015

活動報告書
ACTIVITY REPORTS

玉川大学芸術学部［編］
College of Arts, Tamagawa University［編］

この度『ACRIVITY REPORTS–Tamagawa Art Gallery Projects（以下 TAG Projects）2014–2015活動報告書』第4号を発行いたします。TAG Projectsは、教員と学生が中心となり、大学内のスペースを教育現場ならではのユニークな非営利のイヴェント空間として運用するプロジェクトの総称です。その目的は、学内の成果を広く一般に公開し、また学外の芸術活動を学内に紹介することで実践的に教育的効果をあげることにあります。

TAG Projectsは、2009年に玉川大学芸術学部ビジュアル・アーツ学科教員が中心となり学生にイヴェントの企画運営に携わる機会を提供し、展覧会や講演会等を試験的に行ったことが始まりです。2010年度以降は、玉川大学芸術学部共同研究『大学内オルタナティブ・スペースの運用による、芸術教育の実践とその効果の測定』として継続して助成を受けてきました。活動報告書はISSN番号を取得し、年に一度冊子で発行すると同時に、芸術学部ビジュアル・アーツ学科のホームページ上でも電子媒体にて公開しています。

本報告書では、2014年度に開催した9つ全ての企画を掲載しています。昨年度に引き続き、海外の大学との連携によるレクチャー、国内外のアーティストや国際交流授業の作品展示や発表、学生企画の展覧会、合同講評会の他、新たに学園祭での出店も行いました。表現媒体も多岐に渡り、平面、立体、映像、レクチャー等ジャンルを横断したイヴェントが開催されていることをご覧いただけます。また、イヴェント後の懇親会においても、台湾から来日された教授に中国茶の作法を教えて頂いたり、フィラデルフィアへ研修に行った学生達が、現地の名物チーズステーキを再現して振る舞ってくれたり、楽しみながら自然に国際的教養が身に付く機会もありました。

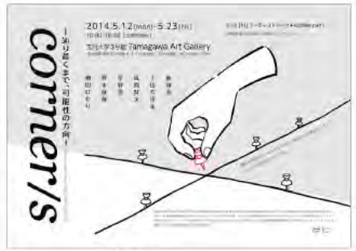
そしてこのように内容が展開してきた背景には、TAG Projectsのサポート体制の変化があげられます。今年度から、学生の継続的な関わりを即すため、毎月8の付く日に自由参加のミーティングを開催しました。その結果、学年や専門分野、時には学部も多様な学生達が集まり、その中から継続して中心的に活動する数名の学生達が現れました。こうして教員と学生が定期的に顔を合わせ、年間を通じて討議する中で、信頼関係が育まれ、企画運営のノウハウの継続した伝達が可能となり、運営が活性化し、新たな企画が生まれました。学園祭への出店も、こうした中から生まれた学生の自主的な発案でした。学生が実践的にイヴェントの企画運営を行うことを通じて教育的効果をあげることを目的とし5年前に始めた活動が、やっと軌道に乗ったと言えるでしょう。

今後も引き続き、より多くの学生の刺激となるよう、また一般の方々にも関心を持って頂けるよう内容を充実させて参りたいと思います。今後ともTAG Projectsの活動に注目して頂ければ幸いです。

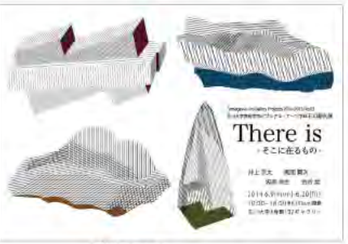
末筆ながら、今年度も多くのアーティストや評論家の方々、教員や職員、学生、その他多くの関係者のご協力、ご支援をいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

TAG Projects 2014–2015　運営代表
藤枝 由美子（芸術学部メディア・デザイン学科 准教授）

01poster



02poster



03poster

04poster

05poster

power spot poster

06poster

07poster

台湾芸術大学×玉川大学
01 写真展［築光］ 楊炫叡個展［本質美感］ 同時開催 04

02 corner/s 辿り着くまで、可能性の方向 06

03 There is そこに在るもの 08

2014年度
04.08 TAG 春学期合同講評会, 秋学期合同講評会 10

坂本のどか個展
05 たらない装置たる weeks with the works 12

アートのパワースポット始めました 14

第2回 玉川大学 ×ドレクセル大学共同授業
06 カルチュラル・リーダーシップ・プロジェクト展 16

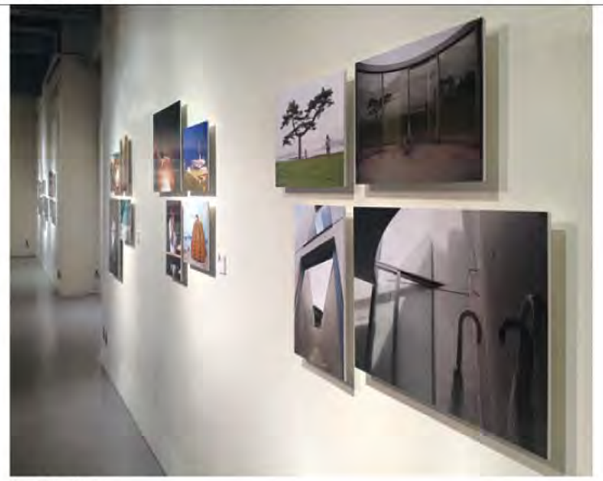
授業［写真B］作品展
07 Re Image 18

学生スタッフの声 20

アンケートまとめ 24

写真展［築光］ 楊炫叡個展［本質美感］ 同時開催

会期　2014年4月14日—4月25日
会場　玉川大学3号館102教室
トーク・イヴェント　楊 炫叡 特別講演会　4月17日 17:00—18:30
関連授業　海外特殊研究（東京—台北）
企画　2014年度芸術学部共同研究
「日本台湾の共同作品制作プロジェクトの教育実践と
その効果に関する考察」 林 三雄・中島 千絵・髙橋 愛
広報デザイン　中島 千絵



会場風景「築光」

会場風景「本質美感」

企画主旨／報告

3回目を迎える玉川大学と台湾芸術大学の合同撮影旅行は、2014年度初めて芸術学部の授業として開講されることになった。その授業にさきがけた今回の二つの写真展は作品鑑賞のみならず、日台合同撮影旅行の活動のアウトラインを総括的に示すことも目的としている。

写真展「築光」は、前年度2013年9月において行われた合同撮影旅行の成果発表であり、「本質美感」はこの撮影旅行を牽引する楊副教授を台湾から招聘しての個展である。

初日、楊副教授の手ほどきによる台湾式お茶会と特別講演会で展覧会はスタートした。異国文化に触れる新鮮さ、写真撮影という行為を通しての国際交流、合同撮影旅行の意味や雰囲気を十分に紹介することができたと思われる。

中島 千絵（芸術教育学科 准教授）

写真展「築光」

合同撮影旅行は2011年にはじまり、巨匠の創作活動をたどることをテーマとしている。2011年は宮崎駿、2012年は黒澤明、2013年は安藤忠雄がテーマとなっている。

写真展「築光」は、2013年9月4日～9日、淡路島・直島・大阪で行われた撮影旅行に参加した両大学の教員と学生、合計8名の作品を発表したものであった。本展の作品は2013年10月24日～27日、台北世界貿易センターでも展示された。

楊炫叡個展「本質美感」

安藤忠雄の創作原点を辿る旅にて巨匠の視点を経て、改めて素材本来の美しさとエネルギーを感じ、時間の流れと共に生まれ変わる新たな本質美感を見いだした。自然界にある素材、光、色、人間から様々な表情とストーリを撮影した。「純粋·光る·多彩·文化」の4つのシリーズで70枚の作品を構成した。　楊 炫叡

出品者

楊 炫叡（台湾芸術大学 図文伝達芸術学科 副教授）
中島 千絵（玉川大学 芸術学部 准教授）
張 婉娟（台湾芸術大学 図文伝達芸術学科 学生）
何 欣怡（台湾芸術大学 図文伝達芸術学科 学生）
陳 怡如（台湾芸術大学 図文伝達芸術学科 学生）
洪 達媛（台湾芸術大学 図文伝達芸術学科 学生）
張 卉歆（台湾芸術大学 図文伝達芸術学科 学生）
白井 杏奈（玉川大学 芸術学部4年）

台湾式お茶会

楊炫叡特別講演会

楊 炫叡　ヨウゲンエイ

台湾芸術大学図文伝達芸術学科 副教授
日本千葉大学意匠デザイン博士
国内外での個展活動（2012～）
Asia Network Beyond Design 優秀賞受賞（2008. 2009）
写真コンテスト審査員活動多数
専門：デジタル写真創作、アイディア開発デザイン
研究：海外での撮影創作講座、国際的視野の育成
趣味：撮影、旅行、温泉

corner/s 辿り着くまで、可能性の方向

会期　2014年5月12日—5月23日
会場　玉川大学3号館102教室
アーティストトーク＋kitchen party　5月16日 17:00—19:00
企画　柳田 ひかり
広報デザイン　飯塚 茜

企画主旨

各作品を"タイムライン"をキーワードに巡る、芸術学部在学生と卒業生6名によるジャンルを超えたグループ展です。壁面にプロジェクションされた出品作家たちのタイムライン映像に併せて、それぞれの作品と共に現在の作品に至るまでの経緯を提示します。会期中には、この展覧会をめぐる話題や、それぞれ過去から現在の作品に至るまでの過程について作家たちが自由に語るトークイベントを、作家が食事を持ち寄るオープンな雰囲気のなかで開催します。

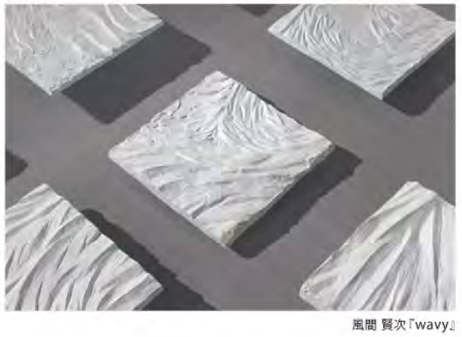
報告

『corner/s 辿り着くまで、可能性の方向』では多くの方に来場頂きありがとうございました。色々な方に見てもらい対話する事でたくさんの収穫がありました。今回の展示を活かし、これからも各々、展示をする機会があります。作家達のこの先の「タイムライン」も見守って頂ければと思います。

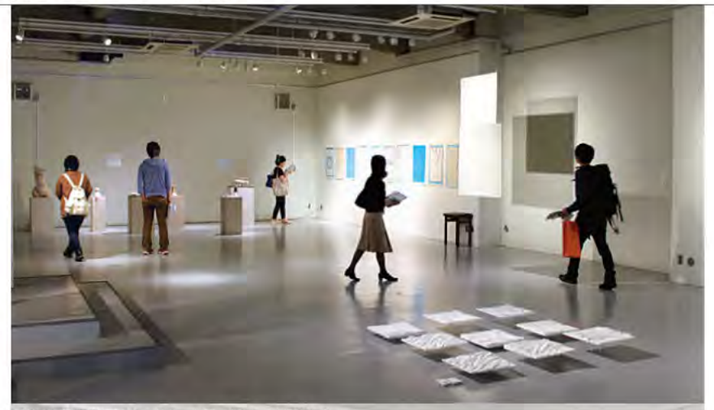
企画者 柳田 ひかり

出品者

飯塚 茜［情報デザイン］（ビジュアル・アーツ学科2014年卒業／東京工芸大学芸術学研究科修士課程1年）
上田 奈津美［情報デザイン］（ビジュアル・アーツ学科4年）
風間 賢次［彫刻］（ビジュアル・アーツ学科4年）
星野 愛［陶芸］（ビジュアル・アーツ学科4年）
野本 直輝［彫刻］（ビジュアル・アーツ学科2012年卒業／東京藝術大学大学院映像研究科修士課程2014年修了）
柳田 ひかり［写真］（ビジュアル・アーツ学科4年）



風間 賢次『wavy』



奥から時計回りに星野、野本、上田、飯塚、風間の作品

手前から奥へ向かって星野、野本、上田、柳田、風間の作品。
奥の壁面に各作家のこれまでの「タイムライン」がプロジェクションされた。

飯塚 茜『好きなように』（部分）

柳田 ひかり『Spot Light』（部分）

野本 直輝『エスコート』（部分）

上田 奈津美『青い部屋』（奥の壁面）

出品者コメント

自分の今までの活動をタイムラインと共に展覧会という形で振り返る事ができ、貴重な経験になりました。自分にとって何が分岐点になるのか、インプットしたものをどうやってアウトプットしていけるのかを、今後の制作活動でより意識的に考えていきたいと思います。　飯塚 茜

この展示を通じて、他人から見た作品がどう見えるのかを知ることができた。展示に携わった方々と交わした言葉を忘れない様に意識しながら、あの時の展示は自分にとって何だったんだろうということをこれからも考えていこうと思います。

上田 奈津美

この展覧会を見てもらうことで、見てもらった人それぞれが、方向性や可能性を考えるきっかけになったら良いなと思っていました。しかし始まってみると、私自身がこの展覧会を通して、自分自身のこれからの方向性を模索していて、自分にとっても大変意味のある展覧会になったと思います。　風間 賢次

しっかりとしたコンセプトのあるいい展覧会だったと思います。カチッとした思惑が作品の飛躍に繋がる部分もあれば、逆に予定調和的になってしまう部分もあり、改めて作品制作の難しさを感じました。　野本 直輝

卒業制作を考え始めたときに、タイムラインという展覧会に参加させていただいたことで、今までの自分の活動と、これからの活動を見つめ直すことができ、自分の方向性も見えてきたような気がします。今後の活動に繋がる展覧会になり、とてもいい経験になりました。　星野 愛

「もう終わりなのか。」 展示最終日、そんな事を思っていました。展示を自分たちで作る事、見るという事に重点を置いたこの展示は思った以上の出来で、たくさんの収穫がありました。作品は作って終わりではなく展示をする。そうする事でたくさんの意見を聞くことができる。作品について意見を交わせるその空間は終わるのが惜しいほど幸せな空間でした。　柳田 ひかり

corner/s
timeline

There is　そこに在るもの

会期　2014年6月9日—6月20日
会場　玉川大学3号館102教室,1階ロビー
ギャラリー・トーク　6月11日 17:30—19:00
企画　井上 京太
広報デザイン　渋谷 栞

企画主旨

石彫という彫刻表現を用いて、大学で学んできた成果を展覧会というかたちを通して発表するとともに、自らが行ってきた表現について反芻する場と時間を設ける事を開催の目的とした。また、後に続く学生が学ぶべき美術表現という手法の中で、自己の可能性を感じてもらえるような展示となることを期待し企画にあたった。

学生のコメント

石という素材は制作に時間がかり、完成した作品は半永久的に残っていくことになる。そこで私は、石が内包している時間や記憶をコンセプトとした。
制作を始めた当初は終わりが見えないなかで制作していたが、時間をかけて石と格闘する中で、徐々にかたちになっていき、今回の展覧会で空間の中に存在させる事が出来た。
しかし展覧会で作品と向き合うと、時間をかけすぎた故に、最初の勢いやスケールが小さくなってしまったと感じる事も多かった。このように展示をする事で、鑑賞者だけでなく、自分自身も自分の作品や表現と向き合い、感じて考えることで、次へとつなげる事ができただけでも、自分にとって大変意義のある展覧会であった。　風間 賢次

出品者

井上 京太（ビジュアル・アーツ学科 非常勤講師）
風間 賢次（ビジュアル・アーツ学科4年）
坂部 卓生（ビジュアル・アーツ学科4年）
渋谷 栞（ビジュアル・アーツ学科4年）

報告

何もない空間に、石という実材が唯一つだけ部屋の中にポツンと言うこと一つとっても、日常的な事とは程遠い事象です。ある意味において現実的ではない光景が展開されることをコンセプトの一つとしました。「そこに在るもの」という表題で企画した展覧会でしたが、そこには実際に表現された彫刻があり、それと同時に作者もその一部として確かに存在しているという事、それを観賞者にも感じてもらえるような展示にしたいと考えました。
私自身は玉川大学に入学して30年になりますが、学生時代に彫刻を専攻し、その中で石を彫って表現するという技法と出会ってから、今までの人生のほとんどの時間を石彫に費やしてきたと思っています。空気を吸ったり、寝食などと同じように当たり前のこととして過ごしてきましたが、何も知らない学生にとっては授業で設定された課題として出会ってしまったある意味事故のようなものだったのかもしれません。しかし、だからと言ってそこから逃げ出せるものでもなく、見ていると、彫り始めると却って夢中になって仕事に向かう姿は、学生当時の自分の姿と重なることもありました。手を入れるにしたがって変わってゆくかたちを目の当たりにしながら、実は自分自身が変わっていっているのだという実感もないままに過ごしているのだろうと思います。それを実感する時には個人差があると思いますが、少なくとも私が感じた感動を学生にも共有してもらえればと思い、指導に向かっています。
また、展覧会を見に来てくれた方々が、見るだけでなく触れる、または空間に溶け込むという行為を通して、実感を感動に変えていってくれている姿を見ていると、インスタレーション、インタラクティブ・アートとしての可能性も見出せるように思いました。美術活動やその他の表現活動を通して社会貢献に繋がるためにより多くの発表や経験をしていくことが私たちの存在意義を高める事になるのだと信じています。　井上 京太

Tamagawa
Art Gallery Projects
2014—2015
no.03

There is...

TAG春学期合同講評会, 秋学期合同講評会

春学期会期　2014年7月28日—07月31日
合同講評会　7月31日 17:00—19:00
秋学期会期　2015年1月26日—1月28日
合同講評会　1月28日 17:00—19:00
会場　玉川大学3号館102教室
企画　藤枝 由美子, 椿 敏幸, 林 卓行
　　坂本 のどか（Tamagawa Art Gallery Projects）
春学期広報デザイン　田畑 柚奈（芸術学部ビジュアル・アーツ学科3年）

企画主旨

自由搬入期間から、一般に向けた公開期間を経て、最終日に参加者や教員ほか公開形式で行う講評会。自身の制作を他者と共有し、よりよい次の作品の完成へと繋げてゆきます。芸術学部生であれば領域、学年問わず、だれでも出品と講評への参加が可能。コンパクトながら自由度の高い展示空間の中に、課題、自主制作、作品数や形態まで、完全にオープンで自由な展示、そして議論の場を創出します。

報告

毎年春学期末と秋学期末の二回行われる、恒例になった講評会。2014年度は新設された芸術教育学科の一年生を加え、作品のヴァラエティがさらに広がりました。制作に本格的に取り組むのははじめてだというその一年生たちも、積極的に自身のコンセプトをかたちにした作品を出品。技術的にはもちろん不足はあるものの、そうした展示や講評のなかに果敢に身をおき、自身の制作を客観化しようとする姿勢の中に、新設学科の学生たちが目指すべきものが見えてきたように思います。新学科のポリシーのひとつである、「芸術を通じた教育」とは、たんに自身を表現するだけにとどまらず、教える側にも学ぶ側にも、そのような自己の「客観化」を促すものだからです。

加えて春学期の講評会には、パフォーミング・アーツ学科から「ジャグリング」のパフォーマンスで参加してくれた学生がありました。このあとジャグリングの本場であるフランス、トゥールーズの学校で学ぶのだという彼が見せてくれたのは、伝統芸能としてのジャグリングに現代のパフォーマンスやインスタレーション、さらにドラマ的な要素を加えたもの。簡素な白い空間を背景に、日用品を巧みに小道具とすることによって作り出されるパフォーマンスに、集まった学生たちがじっと視線を注ぎました。

学期中に制作したさまざまな課題作品を持ち寄る学生たちも依然としておおく、自身の作品や制作のプロセスを完成後にも反省する、そうしたサイクルを自身に課すことが、参加した学生たちのあいだには定着しつつあるようです。

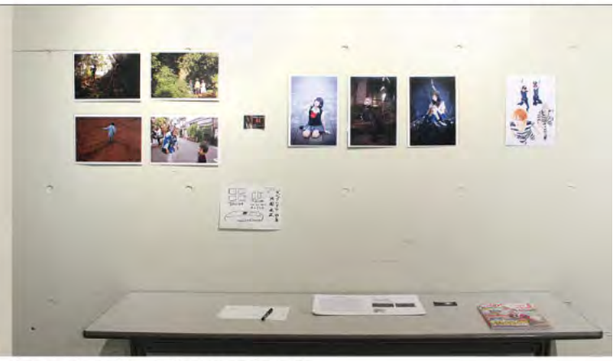
林 卓行（芸術学部芸術教育学科 准教授）

山村 佑理（パフォーミング・アーツ学科3年）によるオリジナルなジャグリングのパフォーマンス（春）

古市 季美（芸術教育学科1年生）による作品のプレゼンテーション（春）

土屋 恵、片岡 真央、島田 真優（いずれもVA2年生）による「写真」授業課題作品のプレゼンテーション（春）

前田 浩四朗（芸術教育学科1年生）作品。陶芸による課題（秋）



片岡 光正（ビジュアル・アーツ学科4年）写真作品（秋）

伊藤 聖美（ビジュアル・アーツ学科3年）作品。「傘」をモチーフにした陶製の照明器具（秋）

藤次 のどか（ビジュアル・アーツ学科3年）作品。「苔」がテーマ（秋）

飯塚 恭平（ビジュアル・アーツ学科3年）作品。「就活生」をテーマにした日本画（秋）

たらない装置たる weeks with the works

会期　2014年10月6日—10月31日
ためいきweek 10月13日—17日
あいまいweek 10月20日—24日
枕 な げ week 10月27日—31日

会場　玉川大学3号館102教室

アーティスト・トーク＆オープニング・パーティー
10月9日 17:00—20:00

企画・広報デザイン　坂本 のどか

企画主旨

芸術教育学科助手、坂本のどかは曖昧な状態をそのまま作品化することをテーマに、音や映像を用い、装置のような作品を作る作家である。今回TAGで個展をするにあたり、作家は自作の装置という側面を改めて強く意識し、作家自身はもちろんのこと、スタッフや来場者など様々な視点から「装置」としての自作の新たな捉え方を探ることを目的とした。本展覧会では週替わりで各出展作品をフィーチャーし、TAG学生スタッフをはじめとする多くの学生と共に自作の違った在り方を探った。

報告

本個展では様々な参加者に作品の二次使用的なことを考えてもらったのだが、その元々の目的は自作の新たな側面を客観的な視点から見出すことや、作品に対する鑑賞者の積極的な関わりを求めることにあった。しかし結果的に作家が得た課題は、自作に対する「鑑賞者」の立ち位置を再考する必要性であった。そもそも坂本の作品は装置的であったり、器のような姿をしていたりと、作品のすぐそばに人が存在することを前提とした作品である。もっと言えば、その「人」も含めて作品なのである。そう考えた時、これまでは作家自身の特権的にしか捉えていなかった、鑑賞者と作品をさらに少し離れたところから観るという第三者的な視点の重要性に行き当たったのである。鑑賞者の積極性を求めてみたり、自作を別の視点から捉え直したりと、ある意味作家的な視点を持つことを鑑賞者に促した本企画の根底には、既に作家自身は持っていた「第三者的視点からの鑑賞」を遠回しに促すような意識が働いていたのかもしれない。

坂本 のどか（芸術教育学科 助手）

Sufficiently Insufficient Equipment

作品《Imymemine》

作品《ためいきまじり》

作品《pillowless》

Tamagawa Art Gallery Projects 2014—2015 no.05

作品《ためいきまじり》に草を生やす

作品《Imymemine》に入って眠ってみる

作品《Imymemine》に悩み事を投げ入れる

本個展では学生スタッフらが坂本の作品を利用した実験的なアイデアを出し、それらを一人一つずつ実際にやってみるという企画を行った。ここではその実験の一部を学生のコメントと共に紹介したい。

「作品《ためいきまじり》に草を生やす」in ためいきウィーク

玉川学園内に生えている色々な雑草を摘み、あたかも作品の排水溝部分から生えているかのように設置した。学生は、日常的に道端で目にする溝から生えた雑草をイメージしこの実験を行ったのだが、実際にやってみると予想外の展開が生まれた。作品の排水溝のすぐ下にはスピーカーが配置されており、雑草を挿すとその先端がスピーカーに直接当たる。作品から時折発せられるためいきの声とともに、その雑草たちは小刻みに震えた。

担当学生スタッフ：田畑 柚奈（ビジュアル・アーツ学科3年）

「作品《Imymemine》に入って眠ってみる」in あいまいウィーク

白い布をかぶり、バスタブの底面に身を横たえるリサーチャー。彼女を覆う布に、作品上部から投影される映像（作家の頭部）がゆらゆらと映る。

学生スタッフコメント

この実験をした際に、ゆりかごの中にいる様な印象を受けました。視界の広がりがバスタブ内では遮られ、幾何学状に切り取られた入口からわずかな情報を得ようとします。その姿が赤ん坊が見る景色と重なったのだと思います。丸みのある形状も一致までとはいかないけれど、どことなく似ている。実験中は、バスタブとしてではなくゆりかごとしてとらえることができました。

上田 奈津美（ビジュアル・アーツ学科4年）

「作品《Imymemine》に悩み事を投げ入れる」in あいまいウィーク

小さな悩み事は小さな紙に、大きな悩み事は大きな紙に書いてそれをくしゃくしゃに丸めてバスタブに投げ入れる。用いた台や行為が作用し、どこか儀式的にも見えるワークショップになった。

学生スタッフコメント

今回の個展の率直な感想は、何々をしたいっという好奇心をくすぐる展示であったと思います。今回の展示には3つの作品がありましたが、それぞれ、入ってみたい、蛇口を回してみたい、眺めていたいという気持ちが、本能的に沸き上がってきました。この様な来場者の積極性を活用した、参加型の展示は、知的好奇心を刺激して面白かったです。

前田 浩四朗（芸術教育学科1年）

展覧会場でデッサンをする

小芝居集団コーンポタージュによるコント「芸術の爆発」

作品《pillowless》のモデルを作品と一緒に再撮影する

アーティストトーク＆炊飯器パーティ

作品《Imymemine》と一緒にアーティスト写真を撮る

アートのパワースポット始めました

日時　2014年11月8日—11月9日
会場　玉川大学3号館前 赤レンガ広場下
代表　鹿目達郎
広報デザイン　上田 奈津美

Tamagawa Art Gallery Projects 2014—2015

企画主旨

「アートのパワースポット始めました」はTAG学生スタッフが企画し、コスモス祭で出店した。パワースポットにはお店のシンボルであるTAGのマスコット「tag坊や」の彫刻作品、うらない、ブローチがあり、出店した学生の個々の能力を活かした作品が展開している。コスモス祭は「祭」なので、雰囲気に合うような店のイメージで「パワースポット」が浮かび、パワースポットに関連するうらない、お守りを制作すると決めた。お守りはお客さんが手に取りやすいようなブローチに形を変えている。店に展示したとき、tag坊やには何か不思議なパワーがあるように感じられた。まるで幸運を与える仏のような。しかし、これは学生が造り上げた1つの作品だと思い出し自然と笑みがこぼれた。そしてtag坊やに愛着がわいた。私だけではなく、お客さんたちもtag坊やを見て、占いをして笑顔になったのだ。自然と笑い合い、会話が弾む場所。そこはまさに「パワースポット」と呼ぶにふさわしい場所ではなかっただろうか。

鹿目 達郎（芸術教育学科1年）

教員コメント

テントを装飾するでも、長机を店のカウンターらしくするでもなく、彼らは既存の「屋外」「テント」そして「祭」にごく自然な形でとけ込む企画を企てた。彼らがそこで小銭に化けさせたのは「モノ」ではない。また100円と交換に来場者が求めたのも単なる「うらない」という紙切れでは決してなく、それは例えば高揚感、お楽しみ、チャレンジ精神、同行者に対するウケ狙い…とにかく期待を上回る（もしくは期待はずれの）出来事である。その証拠に、来場者の満足度はうらないの結果に左右されない。むしろ悪い結果であればあるほどその場に居合わせた人々の会話は弾む。モノではなく、そこで起こるコトに価値を見いだした本企画は紛れもなくアートな活動であり、奇抜に目立つだけではないそのスマートなやり方には目を見張るものがあった。

坂本 のどか（芸術教育学科 助手）

制作記

TAGのキャラクターである、tag坊やの触るとパワーがもらえる彫刻を木で制作した。アトリエに転がっていた丸太に、tag坊やのデッサンを入れ制作スタート！ついにtag坊やとの戦いが始まった。デッサンを基準にしてチェーンソーで荒取りをする。そしておおまかなシルエットが出てきたら次は鑿を使って彫り進めた。この使用した木はとても固く、制作は困難を極めることとなった。さらにより多くの人に触ってもらう為に、つるつるにすることを決意し鑿で形を仕上げた後、ヤスリで磨いた。そして完璧な触り心地になったところで、最後に顔のパーツであるTAGの文字の行程に。文字を木にトレースし一番愛おしく見える大きさを探る。そして大きさ、位置が決まると彫刻刀で彫り込んだ。こうしてただの丸太に命が吹き込まれ、tag坊やはこの世に現れたのである。そして多くの人にパワーと笑顔をもたらしたのであった。

風間 賢次（ビジュアル・アーツ学科4年）

来場記念スタンプ

学生のコメント

おみくじもブローチも、完成させることに手いっぱいで、思い返すと自分のパワーを、パワースポット作りに吸い取られるようなそんな日々でした。でも、体力を使いながら常に動いている感覚が好きですし、一つのものを作り込むことも好きなので、大変ながらも楽しく取り組むことができたと思います。そうして吸い取られた私のパワーが、お客さんのパワーになっていたら嬉しいです。　上田 奈津美（ビジュアル・アーツ学科4年）

今回私はTAGのキャラクターであるtag坊やの彫刻を担当した。平面のキャラクターを彫刻にする難しさを感じながら、また文化祭で実際に置かれている姿を想像しながら制作を進めた。自分の中ではまだまだ形があまく、納得していない部分も多いが、実際にtag坊やに触り笑顔になった人たちの姿を見て思った。「あ～作って良かった」

風間 賢次（ビジュアル・アーツ学科4年）

TAGのパワースポットは、占いや縁結びブローチなどビジュアル・アーツ学科らしく手作り感満載で展開しました。tag坊の像を中心に置き、触ることでパワーをもらうというコスモス祭の中でも異彩を放つ店であったと思います。しかし、お客さんは胡散臭さを感じつつも皆さん笑って帰って下さり、私は学祭で店番をするのは初めてでしたがとても楽しくできました。tag坊の力です。　篠田 咲慧子（ビジュアル・アーツ学科3年）

今までTAGに参加してきましたが、自分から企画したことはなく、TAGのメンバーで何かしたいと思っていました。今回の模擬店で初めて企画し、実現することができました。自分がデザインしたブローチを、目の前でお客さんが買ってくれた時の嬉しさは今でも覚えています。企画、制作、販売など普段だと得られることのない貴重な経験ができてよかったです。tag坊ありがとう。　鹿目 達郎（芸術教育学科1年）

超大吉から超凶まであるうらない

気にいらないうらないはシュレッダーへ

power spot

粗取り

磨く

文字を彫る

完成

パワーをもらう人

縁結びのお守り ムスブローチ

第2回 玉川大学 ×ドレクセル大学共同授業

カルチュラル・リーダーシップ・プロジェクト展

会期　2014年11月17日—11月28日
会場　玉川大学3号館102教室
報告会　11月25日 17:00—
関連授業　海外特殊研究（ドレクセル）国際研究
企画　藤枝 由美子（メディアデザイン学科 准教授）
　　村山 にな（芸術教育学科 准教授）
広報デザイン　市川 滉（メディア・アーツ学科 2年）

企画主旨

本展は、科目「海外特殊研究（ドレクセル）」及び「国際研究」の授業成果報告展として開催した。当該授業は隔年で米国と日本を開催地としており、今年度は米国フィラデルフィアのドレクセル大学にて、9月に10日間、ドレクセル大学生と玉川大学生の共同授業を行った。共同授業としての開講は昨年に引き続き2年目であり、今回は米国で英語で行われる初めての授業であったため、玉川大学生にとって大きな挑戦となった。

授業は“Discover Philadelphia”というテーマのもと、4つの日米合同グループに分かれ、それぞれAvenue of Arts（芸術大通り）、Colonial Philadelphia（植民地時代のフィラデルフィア）、Reading Terminal Market（レディングターミナルマーケット）、Mural Art（壁画）というさらに具体的なテーマが与えられた。学生はグループごとにテーマに沿ってフィールドワークを行い、資料を収集し、それらを基に作品を制作し、プレゼンテーションを行った。玉川大学生も語学力のハンデを乗り越え、大いにグループワークに貢献した。その他にもニューヨーク研修、美術館見学、文化施設の視察、ボランティア活動等を通して国際交流と相互理解を一層深めた。

このような米国で行われた授業について広く一般に公開し、同時に授業の一環として報告会を受講生に課すことで、自らの経験を客観的に見つめさせ、まとめさせる教育的機会とした。

出品者

Avenue of Artsグループ
保原 麻衣（Media Arts 3年）
林 愛夏（Visual Arts 2年）
峰野 博子（Comparative Culture 1年）
Elizabeth Cahill（Business 2年）
Jacob Cook（Game Art and Production 4年）
Krystal Stankunas（Environmental Engineering 3年）

Colonial Philadelphiaグループ
平山 彩子（Music 3年）
宮内 咲貴子（3D Animation 2年）
永島 のぞみ（Visual Arts 2年）
Michael Romeo（Animation & Visual Effects 4年）
Cali Chesterman（Animation & Visual Effects 2年）
Hasanur Rahman（Business 3年）
Li Junlei（Chemistry 3年）

Reading Terminal Marketグループ
石橋 愛生（Computer Music 4年）
土屋 恵（Visual Arts 2年）
須田 彩花（Textiles 2年）
Sterling Becker（Marketing 4年）
Katie Falcone（Biomedical Engineering 3年）
Healthy Moeung（ANFX 2年）

Mural Arts of Philadelphiaグループ
菅 伊吹（Visual Arts 2年）
岡山 花菜（Performing Arts 2年）
市川 滉（Media Arts 2年）
Matthew Pron（Finance & Marketing 3年）
Brian Hom（DIGM 4年）
Sally Im（ANFX 2年）
Joshua Bresler（GMAP）

報告

展示は主に各グループの課題プレゼンテーションパネル、課題プレゼンテーションのパワーポイント資料上映、及び授業全般についてのスライドショーで構成された。報告会では各グループより日本語の内容はプリントで配布され、発表自体はパワーポイントを提示しつつ英語で行われた。それぞれが、米国人の学習意欲の高さと積極性、自分の意見や時間を大切にする姿勢などについて大いに学び、刺激を受けたこと、またグループワークの難しさと同時にリーダーシップを発揮して貢献できたこと、言語・非言語のコミュニケーションを通じて相互理解に至った経験などを発表した。これらを、メモを殆ど見ずに発表する様子から、英語力においても大きな成長が見て取れた。報告会への参加者は主に教員と学生であったが、終了後は外国人教員と英語による質疑応答なども交わされた。

引き続き行われた懇親会では、参加者に手作りのフィラデルフィア名物「チーズステーキ」とドレクセル大学生のレシピで手作りしたクッキーを振舞い、異国の味に舌鼓を打ちながらフィラデルフィアの食文化についても紹介する楽しい機会となった。

藤枝 由美子

プレゼンテーション

観客

ドレクセル大学でのプレゼンテーション

Tamagawa
Art Gallery Projects
2014—2015 no.06

Discover Philadelphia

課題作品より　提案したオリジナルミュージカルアート

「東京駅一番街」の動画のワンシーン

課題作品より　建築物を比較したページ

宗教観の違いを表したページ

ドレクセル大学でのグループワーク

庭園清掃ボランティア体験

フィラデルフィア 9.11 メモリアル

懇親会

フィラデルフィア リバティベル見学

Re Image

会期　2014年12月2日—12月9日
会場　玉川大学3号館102教室
公開授業　展覧会記録写真撮影　12月8日 9:00—12:40
企画　川村 麻純（ビジュアル・アーツ学科非常勤講師）
広報デザイン　石井 茜

Tamagawa
Art Gallery Projects
2014—2015 no.07

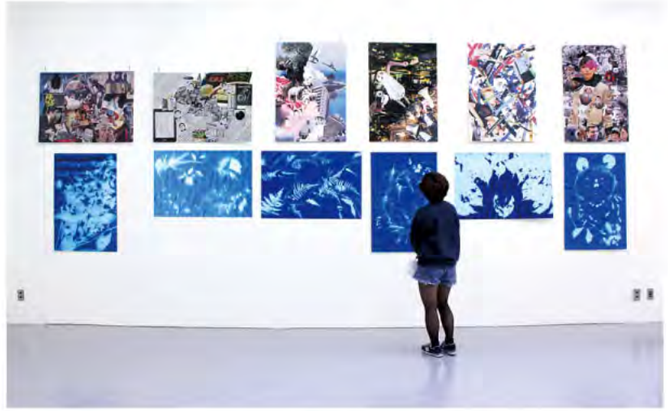
企画主旨

写真Bを受講している学生たち30名による写真展です。
写真Bの授業では、作品制作から展示にいたるまでを通じ、写真について学んできました。本展は、その成果としてブループリントとコラージュで制作した、強度のある一枚の写真作品を制作した授業課題の作品展示です。会期中には公開イベントとして、会場写真の記録撮影を行いました。

報告

川村先生の授業『写真B』では、現代においてひどく簡単に、日常的になってしまった「写真を撮る」という行為、「写真を作品化する」という行為を写真の古典技法であるブループリントやコラージュというアナログ作業を体験することを通して学生達に改めて考えさせます。本展覧会はそうして形になった授業成果を発表する機会として、また展覧会そのものを学生自ら企画し運営することを学ぶ場として開催されるものです。展覧会という発表の場を設けることで、学生達の課題に対する意識は「授業課題」から「作品」へと自然にステップアップします。
昨年度に引き続き、本展覧会では学生の課題作品を展示の為に大判に引き延ばしました。私はその拡大して展示するというプロセスに面白みを感じています。
元々A4サイズで提出された課題作品が大きくなるわけですから、その分制作時には気づかなかったような細部まで目が行き届くようになります。展示に際して、まず学生はミクロの視点を得るわけです。しかし設営時には、大判に引き延ばされた作品群をさらに大きな展示スペースの床に並べ、各々の感覚をたよりに展示順やレイアウトを決めていきます。その行程において、学生は自分の作品を他者の作品と比較し、全体のバランスの中の一部として自らの作品を再度客観視せねばなりません。今度は自分の作品だけ見ていては得られない、マクロな視点から見た自作の特徴を意識することになるのです。展覧会制作を含め、作品制作において重要なことはまさに自作を多角的に、かつ多様な距離感で見ることです。この展覧会にはそれが実感し易い仕掛けが組み込まれているのです。

坂本 のどか（芸術教育学科 助手）



会場風景

授業風景　ブループリント制作（上）コラージュ制作（下）

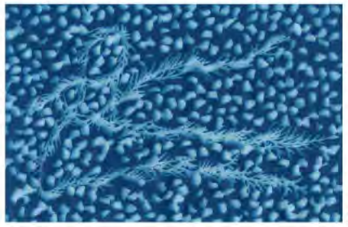
設営風景

撮影風景

出展者——授業［写真B］履修者

安部 早耶香（ビジュアル・アーツ学科2年）
井出 桃子（ビジュアル・アーツ学科2年）
尾崎 梢（ビジュアル・アーツ学科2年）作品5
坂本 巧（ビジュアル・アーツ学科2年）
高橋 真穂（ビジュアル・アーツ学科2年）
都賀 百合子（ビジュアル・アーツ学科2年）
土屋 恵（ビジュアル・アーツ学科2年）
林 愛夏（ビジュアル・アーツ学科2年）
氷室 菜生（ビジュアル・アーツ学科2年）作品2
本山 百合恵（ビジュアル・アーツ学科2年）
森田 啓太（ビジュアル・アーツ学科2年）
劉 静瑛（ビジュアル・アーツ学科2年）
石井 茜（ビジュアル・アーツ学科3年）作品8
加藤 梨絵（ビジュアル・アーツ学科3年）作品6
桐川 直也（ビジュアル・アーツ学科3年）作品1
長南 佑理子（ビジュアル・アーツ学科4年）
栗山 あやな（ビジュアル・アーツ学科4年）作品7
関口 大樹（ビジュアル・アーツ学科4年）作品3
瀧沢 絵里子（ビジュアル・アーツ学科4年）
徳永 里沙（ビジュアル・アーツ学科4年）
若松 了亮（ビジュアル・アーツ学科4年）作品4
重田 実花（メディア・アーツ学科2年）
柴 萌絵奈（メディア・アーツ学科2年）
清水 花菜（メディア・アーツ学科2年）
森井 苑望（メディア・アーツ学科2年）
木佐 祥子（メディア・アーツ学科3年）
鈴木 諒（メディア・アーツ学科3年）
梶岡 梨花（パフォーミング・アーツ学科2年）
千種 英莉（パフォーミング・アーツ学科2年）
谷口 芽維（パフォーミング・アーツ学科3年）
芝田 らら（パフォーミング・アーツ学科4年）

1


2

3

4

5

6

7

8

池邉 舞香

芸術学部 芸術教育学科1年

普段経験することができない個展のお手伝いをすることができてとても充実した時間を過ごすことができました。
個展の開催にあたって、空間を作り出すために壁を真っ白に塗り替えたり、床をピカピカにしたりしました。みんなで和気藹々とした雰囲気だったので気軽にお手伝いができそうと思い、参加したのがきっかけです。
個展のパーティでは各自「装置」としての炊飯器を持ち寄り、creativeな料理を作り、提供し、個展を観に来た人たちと料理を楽しみました。TAGを私の専門の音楽と結びつけるにはバックグラウンドに音楽を流したり、またイベントとして前座で音楽の演奏を入れたりしたら良いと思いました。
onとoffがはっきりしたチームなのでとても密に時間が過ごせる場所だと思います。

前田 浩四朗

芸術学部 芸術教育学科1年

最初は何となく友達と一緒に行ってみたのが、TAGに参加したきっかけでした。入学した当時は、すべての事が初めてだったので、早くこの大学になれようと思い、様々な先輩と関われる事を期待してTAGに参加しました。
実際に参加してみると、多くの先輩たちと話が出来ました。そして先輩たちと話していく中で、先輩、後輩といった縦の関係が築け、得られたと思います。
今後の自分の活動に活かせそうだと思った点は、やはり展覧会をする上での主な流れだと思います。私はTAGに参加して、展覧会の手伝いをした時、初めてDMというものがある事を知りました。このように展覧会の手伝いをする事は今後、自分が展覧会をする上で大きな経験になったと思います。
上記でも述べたようにTAGでは多くの先輩たちと話せ、その中で四年生とも話せる機会があり、就活について実際の体験談を聞く事が出来ました。
私は芸術教育学科に所属しています。私にとって、展覧会の設営、また実際に作品を作っている先輩たちとの身近な触れ合いは、自分の見識を広げるといった関連性があると思います。

Tamagawa Art Gallery Projects 2014—2015 Staff

Staff

鹿目 達郎

芸術学部 芸術教育学科1年

TAGの参加のきっかけは興味本位でしたが、活動の参加、不参加は個々の自由で、気楽に足を運べて続けやすいと感じ参加しました。TAGに参加してみて、私は良かったと感じました。いろんな企画があり、常に新鮮な気分で飽きません。やりがいがあって面白いです。展示された作品を通して、様々な人たちと知り合うことができ、多くの情報・知識・アイディアなどを得ることができました。今後は、私も作品を制作して何か展示できたらいいなと考えています。

山口 大海

芸術学部 芸術教育学科1年

私は芸術学部の助手・坂本のどかさんの個展「たらない装置たる」の中の炊飯器パーティーに参加することをきっかけに一時TAGプロジェクトに参加させていただきました。炊飯器パーティー以外にも、坂本のどかさんの個性あふれる作品がとても面白く思いました。特に、この個展の展示物を活かして「何かをやる」という企画もありましたが、面白かったです。今回、TAGプロジェクトに参加してみて、自分では「作品と向き合う」という「新たな発見」が見出せたのではないかと思います。また機会があればTAGプロジェクトに参加してみたいと思います。

杤山 晴之介

文学部 比較文化学科1年

芸術学部の友人からの紹介でTAGのことを知りました。僕の所属は文学部で学部が違うのですが、出身の高校で芸術系の学科に所属していたことから、TAGの活動内容に興味が持てました。学部が全く違うことが不安ではありましたが、何事も挑戦と思い、TAGのミーティングに参加しました。
三号館で毎月行われる展示の手伝いが、TAGの主な活動内容でした。それ以外でも、たこ焼きパーティーや、炊飯器での料理作りなど、展示以外の企画も盛りだくさんでした。TAGメンバー以外の人々も集まって、アットホームな雰囲気が楽しいです。また、先輩方との交流や他学部との繋がりを作る場としても非常に良いと思います。
TAGは美術、芸術の知識や技術無しでも、集まった方々との交流を楽しむことができるので、芸術学部じゃない方でも楽しめます。そして8のつく日が活動日なので、勉強に専念したい方でも無理なく参加できるのも魅力です。部活やサークルに入ってない方にもお勧めします。
拙い文章ですが、これを読んで少しでも興味を持ってくれた方は、ぜひ8のつく日に、TAGの活動を見学してみてください。

米富 千夏

芸術学部 ビジュアル・アーツ学科 2年

私は昨年度のTAGの活動に多く参加させて頂きました。特に印象深いのは、片山裕さんの「コワレモノの系譜」でのライブペインティングのスタッフとしてお手伝いをさせて頂いたことです。主に会場準備やライブ中のアシスタントを行ったのですが、初めてのことで手際が悪くなる場面もありましたがとても楽しく活動出来ました。何よりも、作家さんの生のパフォーマンスに携わる機会はなかなか無いことなので、とても刺激になりました。

TAGの活動はこのようなイベントのスタッフとして参加することだけでなく、その後の打ち上げでの交流も魅力的なところです。ライブペインティングの時の打ち上げでは、プロのカメラマンや広告デザイナーなど様々なジャンルの方が参加しており、その職に就くまでの過程やアドバイス、個人的な相談にものって頂きました。あの時お話しした皆さんは、自分の職に誇りを持ち、子どものようなキラキラと輝く瞳をしていたことを今でも覚えています。私も将来、どんな職に就いても自分に誇りを持てるような人になりたいと感じました。

TAGの活動は作品を見たり、イベントに参加するだけでなく、様々な情報を得ることが出来る場でもあると思います。もしかしたら、今後の進路ややりたいことなどに悩みがあればここで解決するきっかけが生まれるかもしれません。少しでも興味がある方は参加してみてください！

菊池 智史

芸術学部 ビジュアル・アーツ学科 3年

TAGの活動の参加は基本的に個人の都合に合わせることが出来るので、アルバイトや忙しいサークルや部活等を優先しなくてはならない時でも気負うことはありません。

また、暇な時間が多く自分が何をしていいかわからない、何をしたいのかわからないという学生にもオススメです。TAGは関わろうと思えば自分の納得いくまでしっかり関わっていって企画をこなすことが出来るからです。

TAGという場はその他にも同じ学部の上級生や下級生との貴重な交流の場としても有用です。講義のわからないところや先輩の実体験を聞くことが出来るのでよりよい学校生活を送るために必要な知識も身につきます。

上田 奈津美

芸術学部 ビジュアル・アーツ学科 4年

TAGで活動していた理由は、今はまだはっきり分からないのですが、たぶん視野を広げたかったのだと思います。展示をする際にどんな道具を使うの？どんな見せ方があるの？どんな人たちが集まってくるの？単純にそういったことを知りたかったんです。また、日々の活動の中では、透明なガラスに貼るカッティングシートの奇麗さに気付いたり、来場するお客さんの中には他の学部生も居たりすることをその場で知ることができ、またやりたい気持ちに繋がっていきました。そういう活動を通じて、最終的に自分は人が集まる場所をつくり出すことに興味を持っていることを知りました。卒業後の進路もその延長線上にあります。最後に先生方、TAGメンバーのみなさまありがとうございました！

Staff

篠田 咲慧子

芸術学部 ビジュアル・アーツ学科 3年

私は3年生になったばかりの時、初めてTAGの活動に参加した。私の場合、展示の運営に興味があったわけでもなく、何かの団体に所属したいと思ったわけでもなく、ただその時にお手伝いをしてみようかと思ったという些細なきっかけで参加した気がする。

グループ展の準備の手伝いを主に行っていたが、自分の作品でなくとも、人の作品を通して芸術に触れられるのがとても楽しかった。照明を調整したり作品を設置することもなかなかおもしろいと思った。そして私がTAGに参加して一番大きく変化したものは人との関わりや時間だと思う。どこかに所属するのは初めてで、TAGという参加や活動が自由な枠でも、定期的に集まって話し合ったり、何かをやるための計画をしたりということが私にとってはとても有意義で制作以外に打ち込めるものとなった。コスモス祭にも出店し、皆で楽しく準備をしたり店番をしたりなど達成感もあり、TAGに参加できて良かったと思う。展示の設営をする際も、コスモス祭で模擬店を出す際も、人に何かを伝えることや提供することを常に考えさせられ、身を持って学ぶことができたと思う。

細沼 里奈

芸術学部 ビジュアル・アーツ学科 4年

TAGに参加したきっかけは、元々展示のお手伝いをする機会が多かったので、その延長で参加してみようと思いました。

活動開始直後は自分が唯一の四年生だったので、下級生を陰ながら支える事を目標に少しずつお手伝いをしていましたが、結果的に縦のつながりが濃くなったと感じました。自身が入学した当初は参加できる活動がほとんどなかったので、TAGのように新入生が学科の一員として他学年と早々に関わる事ができる機会は大変貴重だと思います。

また、展示に関する一連の流れを体験する事ができました。生徒の企画・立案を聞き、展示案やスケジュールを共に組み立て、トークショーの準備から搬入・搬出作業まで経験しました。たとえ学内であっても、いち芸術学部生として知っておかなければならない「作品を人にみせる」意識、そして「そのための展示を作り上げる」意識を学びました。

Tamagawa
Art Gallery Projects
2014—2015 Staff

アンケートまとめ

01 写真展［築光］楊炫叡個展［本質美感］

アンケート結果

1 所属を教えてください。

1年生	7
2年生	9
3年生	3
4年生	3
無回答	1

2 良かった点は何ですか。

写真や展示の手法を学べた	7
色々な人との交流	20
お茶やお菓子の文化を知った	6
ヤン先生のお話	4
スタッフとしての達成感	4

3 授業を履修したいといましたか？

思った	15
思わない	2
わからない	5

4 TAGの今後の活動で、やって欲しいこと、やりたいことは何ですか。

- 今後もこのような台湾と関われるイベント等を用意していただきたい。もっとたくさんイベントをやって欲しい
- 夏祭り
- コスモス祭展覧会の集客の為のイベント
- 学生が企画して何か展示、ワークショップを行いたい　2名
- 遊園地のイルミネーション

写真展［築光］楊炫叡個展［本質美感］　楊炫叡特別講演会

02 corner/s 辿り着くまで、可能性の方向

アンケート結果

1 所属を教えてください。

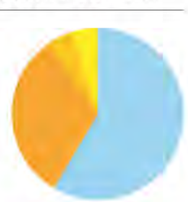
学生	27
教職員	7
一般	8
他学部	3
無回答	1

2 この企画をどこで知りましたか？（複数回答可）

ポスター等掲示物	21
友人・知人	24
通りすがり	4
学部／学科webサイト	3
twitter ／ facebook	2

3 TAG（=Tamagawa Art Gallery Projects）を知っていましたか？また、その活動に参加したいと思いますか？（複数回答可）

知っている	24
知らない	13
参加してみたい	2
既に参加している	2



4 本企画に関するご意見ご感想、今後のTAGへの要望等

- 「辿り着くまで」との企画は、とてもすばらしいと思います。理解不足のためでしょうか、もう一歩進めた形のものが出来ていたらと思います。
- 皆さんの作品素敵でした。これからも頑張ってください。2名
- とても刺激をいただきました！何か自分らしい作品を作りたいと思いました。ありがとうございました。
- 小規模だけど、今までで一番個性的・見ごたえがあったと思う
- 個性的な作品が多く見ていてワクワクした
- 楽しかった、みんな芸術学部に入ってよかったと心の底から思った
- 違う視線から見るものも楽しいと思いました
- 作品についての解説パネルがあったらいいなと思いました。素敵な空間でとっても良かったです!!
- とても楽しませてもらいました。計画準備大変だと思いますが、やっぱり若いうちはどんどんやって見せてもらえると嬉しいです。次回期待しています！
- 40くらいのキャリアのある作家で同様の企画見てみたい
- とても刺激を受けました素晴らしかったです。とても心に来るものがありました
- 気が向いたときだけ参加できるシステムなら参加してみたい
- 私も参加してみたいです　　他

03 There is そこに在るもの

アンケート結果

1 所属を教えてください。

学生	17
教職員	8
一般	9
他学部	4

2 この企画をどこで知りましたか？（複数回答可）

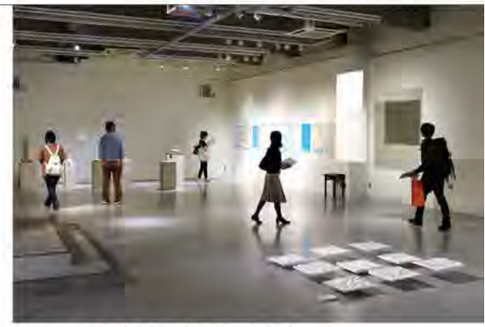
ポスター等掲示物	16
友人・知人	15
通りすがり	4
学部／学科webサイト	0
twitter ／ facebook	1

3 TAG（=Tamagawa Art Gallery Projects）を知っていましたか？また、その活動に参加したいと思いますか？（複数回答可）

知っている	11
知らない	13
参加してみたい	6
既に参加している	4

4 本企画に関するご意見ご感想、今後のTAGへの要望等

- もっと多くの人の作品を見たい。校内全域に散りばめて欲しい。もっと芸術学部の活動を知ってほしい。
- 暗幕を使って空間をより暗くする展示もTAGでできる事がわかった。野外で展示した方がいいかも!!
- 影も芸術作品として表しているのかなと思いました。でも、私には難しかったです。
- 井上先生の一つ一つの作品ではなく、それらが生み出す空間に名前をつけるのがとてもすてきだと思った。作品一つ一つのテーマとその作品が生み出す空間は全く別物なのだなと改めて気づかされた。とても居心地のよい空間だった。ギャラリー（室内）を使って展示することの特殊性について考えさせられ、自分の今後の展示に生かしていきたいと思った。
- 石のもつ様々な表情に驚きました。
- もっと会場（ギャラリー）を展覧会場としてきれいにしたほうが良いと思う。
- 反射具合がよかった。色々考えさせられた。
- 石の彫刻の展覧展を初めて見たので、とても新鮮でした。どの作品も独特の味があって、見ていてとても面白かったです。
- 楽しく拝見させて頂いています。今後の皆さんのご活躍をお祈りしています。
- 立体作品のすごさを五感でいただきました。
- 石は斬新ですがとても興味深いです。
- 校内の人間が知らないというのは悲しい。もっと大々的に発表してはどうか。
- 他大学のこういった展覧会は面白いです。なんかお勉強になります！
- 彫刻かっこいい！
- 石ツルツル！
- 私には作れなさそうな作品ばかりでした！すごい！
- 良かったと思います。



corner/s 辿り着くまで、可能性の方向　会場風景

There is そこに在るもの　会場風景

Questionnaire

Tamagawa
Art Gallery Projects
2014—2015

Tamagawa Art Gallery Projects 2014–2015

ACTIVITY REPORTS／College of Arts, Tamagawa University［編］

活動報告書／玉川大学芸術学部［編］

協力／助成

平成26年度 玉川大学芸術学部共同研究：

［大学内オルタナティヴ・スペースの運用による、芸術教育の実践とその効果の測定］

研究代表者：藤枝 由美子（メディア・デザイン学科 准教授）

研究分担者：林 卓行（芸術教育学科 准教授）

椿 敏幸（芸術教育学科 准教授）

ジョナサン・リー（メディア・デザイン学科 准教授）

特別協力：坂本 のどか（芸術教育学科 助手）

学生スタッフ：上田 奈津美，風間 賢次，細沼 里奈（4年生）

田畑 柚奈，菊池 智史，桐川 直也，篠田 咲慧子，飯塚 恭平（3年生）

片岡 真央，檀原 瑠香，氷室 菜生，米富 千夏（2年生）

池邉 舞香，鹿目 達郎，菊地 桃佳，鈴木 裕介，鈴木優成，柾山 晴之介，

原 佑里絵，前田 浩四朗，山口 大海（1年生）

報告書デザイン　松本朋子デザイン室

発行日 2015年3月31日

発 行　玉川大学芸術学部

〒194－8610 東京都町田市玉川学園6－1－1

tel 042－739－8119（芸術教育学科助手室）

印 刷　株式会社グラフィック